

## 実在論的転回？

—— シェリング・ヘーゲル自然哲学にかんする

近年の研究動向について

中 島 新

### 序

本稿の目的は、シェリング・ヘーゲル自然哲学にかんする近年の研究状況と、その動向を紹介することにある。ただし、網羅的な紹介を目指すのではなく、特に目を引くものを紹介するとどめる。個別の論点に立ち入る前に、シェリング・ヘーゲル自然哲学研究を取り巻く状況について、いくつかの哲学的動向との関係すべてをおきたい。

いわゆる「現代実在論」の動向そのものについてはすでに多くの解説があるため詳しく論じないが、こうした動向の背景にドイツ古典哲学研究があることは、強調しておく必要がある。<sup>1</sup>例えばイアン・ハミルトン・グラント（思弁的実在論）、マルクス・ガブリエル（新しい実在論）、そしてアントン・フリードリヒ・コッホ（解釈学的実在論）らの「実在論」的立場は、それぞれのドイツ古典哲学研究を下地にしている。特にグ

ラントとコッホは、近年のシェリング・ヘーゲル自然哲学研究における一つの参照軸にもなっている。

また、近年のシェリング・ヘーゲル自然哲学研究が「物質」ないし「空間・時間」概念に注目していることも、特徴的な動向のひとつである。これは特にグラントが「有機体論」批判を展開し、その代わりに「物質」概念の意義を強調していることや、コッホが「解釈学的実在論」の主要テーゼにおいて「空間・時間」概念を論じていることの、ひとつの影響作用と見ることができ。またそれ以上に、現代実在論の多くが「ポスト／トランス／ノン・ヒューマン」の思想との親和性を表明するなかで、自然哲学研究もまた「人間Ⅱ生命Ⅱ有機体」という図式の克服可能性を、「物質」概念に求めているとも考えられる。多くのシェリング・ヘーゲル自然哲学研究がこれまで「有機体論」や「生命概念」の解明に主軸を置いていたことを踏まえれば、現在の研究動向は大きな転換点を迎えていると言えるだろう。

しかしこのことによって、完全に「有機体論」が研究対象から消え失せてしまったわけではない。むしろさまざまな仕方での再検討・再評価が試みられている。例えば近年では「生物学の哲学」という観点からヘーゲル自然哲学の再評価が進められている。生物・非生物（あるいは自然・非自然）の区別そのものが揺らいでいる状況において、ヘーゲルの自然哲学がどのような展開可能性を持つのかについて、これらの研究は重要な示唆を与えてくれる。またいわゆる「人新世」という現代的課題に応答するために、「自然と人間」の対立とその調停という素朴な図式に取って代わる多元的な自然・人間モデルの構築が試みられている。

## 1 シェリング自然哲学研究について

### 1・1 ドイツでの研究状況——「歴史批判版全集」と同一哲学以後のシェリング自然哲学

ドイツでの研究状況において特筆すべきは、いわゆる「歴史批判版全集」の近年の刊行状況である。二〇〇九年の第十巻刊行を境にしばらく途切れていたが、近年では再び継続的に刊行され始めた。自然哲学にかかわる資料を挙げれば以下のようなになる。

- ・二〇一七年刊行第十一巻…『ブルーノ』（二八〇二年）
- ・二〇一八年刊行第十三巻…『自然哲学の諸考案 第二版』（一八〇三年）
- ・二〇一九年刊行第十二巻…「思弁的自然学の新雑誌」および「哲学批判雑誌」所収の諸論考
- ・同年刊行第十五巻…「学としての医学年報」所収の諸論考
- ・二〇二二年刊行第十六巻…『反フィヒテ論』（二八〇六年）、『宇宙霊 第二版』（一八〇六年）の増補部および同時期の諸論考

シェリング自然哲学研究において、いわゆる「同一哲学」期以後の自然哲学は敬遠されがちであった。しかしこれら全集の刊行を受けて、中期シェリングの自然哲学も注目されつつある。特にシェリングの医学・生理学思想を研究するうえで、この時期のテキストは欠かせない。こうした動向を受けてか、二〇二三年二月にはヴァッパータルにおいてシェリングのヴェルトツブルク講義の一部である『全哲学の、とりわけ自然哲学の体系』（一八〇四年）をテーマにした国際会議が開催され、とりわけ自然哲学に焦点が当てられた。

シェリング自然哲学にかんしてドイツ語で書かれた単著は、近年では以下のものがある。ゼバステイアン・シュヴェンツフォイアーの『自然と主体…シェリング自然哲学の基礎付け』（二〇一二年）<sup>②</sup>は、同一哲学期までの「自然哲学」の位置づけを解明し、そこから「自由の哲学」への展開を跡づけている。しかし上記の全集刊行に先立つものであるためか、まさに同一哲学から自由の哲学へ至るあいだの時期の自然哲学への論究が欠けている。より最近のものでは、フォルクマー・プロイスの『プラトン研究から思弁的幾何学まで至るシェリング自然哲学の展開』（二〇一八年）<sup>③</sup>が興味深い。同書の副題は「Die Konstruktionen des Raumes, der Naturkräfte und der Materie in Schellings Naturphilosophie 1794-1802」となっており、シェリングのいわゆる「物質の構成理論」を初期自然哲学に絞って検討している。注目すべきは、本書が初期のシェリングの思想にまで、すなわちシェリングのプラトン研究にまで遡って「自然哲学」を読み取り、さらに「数学の哲学」として再構成しようと試みている点である。従来の研究では、ヘーゲルと比べても、数学に対するシェリングの関心の薄さや無理解が強調されてきた。しかしながら本書はそうした従来の理解に再検討を迫るところで、シェリング自然哲学の新たな展開可能性を示している。

## 1・2 英米圏での研究状況 —— 「シェリング・ルネサンス」と「グラント以後」

近年のシェリング自然哲学研究の展開は、英米圏の研究が牽引していると言っても過言ではない。<sup>④</sup>二〇〇〇年代初頭からの英米圏のシェリング研究が、「シェリング・ルネサンス」と呼ばれるほどの興隆を見せているからである。とくに、「思弁的実在論」のメンバーに数えられるイアン・ハミルトン・グラント Ian Hamilton Grant の著作『シェリング以後の自然哲学』（二〇〇六年）<sup>⑤</sup>の影響は大きく、すでに「グラント以

後」と呼ばれる研究状況が生じている。

シェリング哲学全体を再評価する英米圏での機運の高まりは、グラントの登場以前に、つまり一九九〇年代にすでにあり、その再評価、すなわち「シェリング・ルネサンス」を決定的なものにしたのは、『新しいシェリング』(二〇〇四年<sup>7</sup>)と『シェリングの現在』(二〇〇五年<sup>8</sup>)だった。ユルゲン・ハーバーマスやマンフレート・フランクらによるシェリング研究の英訳を収めた前者の論集や、三つの主題に分けられた十四本の論考からなる後者の論集、それに加えて同時期に急速に進んだシェリング著作の英訳が、シェリング再評価の流れを決定づけた。

こうした状況でとりわけ「自然哲学」の重要性を強調したのがグラントであった。ただし、彼の著作が大きな転換点となったのは、それまでの英米圏のシェリング研究においてほとんど顧みられてこなかった「自然哲学」に注目したからだけではなく、いくつかの点でグラント独自の解釈の方向性をも提示したからである。同書におけるグラントのシェリング自然哲学読解の特徴は以下のようにまとめられる。

1. 「シェリング主義」。グラントは従来の英米圏でのシェリング研究において「自然哲学」が無視されてきたことを批判しつつ、自らの立場を「自然哲学としてのシェリング主義」(Grant 2008, 3)と標榜する。グラントにとってシェリング主義とはシェリングの自然哲学を正当に評価・受容する態度を意味する。<sup>9</sup>
2. 「唯一のシェリング」像。シェリング哲学研究において、シェリングの思想展開全体に一貫した構想があるとする立場と、それを否定する立場からの議論があった。この問題に対してグラントは「唯一のシェリング」を強調し、さらにすべての時期に通底する構想を「自然哲学」だとした。このことは、初期シェ

リングだけでなく、「神話・啓示の哲学」に取り組んだ後期シェリングの思想展開までも一貫して「自然哲学」と捉えることを意味する。

3. 「有機的な自然理解」批判。グラントは「生命の哲学」ないし「有機体の哲学」を、カントおよび（シェリングを除く）ポスト・カント哲学の特徴だとして、彼らが生命や有機体という言葉で実質的に「人間」をイメージし、そのイメージに沿って自然を捉えようとする「人間中心主義」の傾向にあると見なす。さらにグラントはカントを（その源流にアリストテレスを想定し）「事物化されない」自然と現象的自然（事物化された自然）を切り離す「二世界的な自然学」だと批判し、シェリング・プラトンの「一世界的な自然学」の意義を強調する。そのためグラントにとって「形而上学と自然学との分裂を哲学が克服するときに、シェリング主義はいつでも甦る」(Grant 2008, 5) ことになる。

4. 「地質学的なシェリング理解」。グラントは『シェリング以後の自然哲学』の結論部で、ドゥルーズによる地質学的なシェリング自然哲学読解の意義を強調しながら、同時にその「超越論主義」的な自然理解を批判する。この議論の眼目は、ポスト・カントの哲学における「根拠」をめぐる問題圏のなかで、シェリングからドゥルーズにいたる地質学的な自然理解の系譜を描くことにある。そこでグラントは、カントやフィヒテに見られる、自由による「根拠づけ」を通じた自然の解消（「自由」への一元化）を批判し、むしろ自然の徹底した「無根拠化」を通じて、「無底」における自然の存在論的生成の次元を解明したシェリングの立場を擁護する。

すなわち、グラントが英米圏でのシェリング研究における転換点と呼ばれるようになったのは、彼がシェリ

ング哲学の全体に「自然哲学」が通底しているという「唯一のシェリング像を主張し、とりわけその核心が「事物化されない」自然とその力動的展開による「地質学」的な存在生成論にあることを明らかにしたからである。

『シェリング以後の自然哲学』に後押しされた「シェリング・ルネサンス」は今もなお続き、さらに「グラント以後」と呼ばれる研究状況が生じている。<sup>(1)</sup> そのなかでもとくにベン・ウッダード Ben Woodard による研究は、グラントの「シェリング主義」を引き継ぎつつも、独自の展開を見せている。

ウッダードは『シェリングの自然主義・運動、空間、思考の意志作用』(二〇一九年)<sup>(2)</sup> において、シェリング自然哲学読解にもとづき、「自然」を「宇宙全体を形づくる、入れ子状になった諸々の物理的システムからなる開放的系列」(Woodard 2019, 1)と表現する。換言すれば、個々の物理的産物だけでなく、産物を産出しその性質を構成している「プロセス」も含めた複層的なシステムを自然と考える、ということである。ウッダードのこうした自然理解は、「自然・非自然」という区別の撤廃 (ibid.) と「認知能力の自然化」(ibid.) という二つの帰結を持つ。

ウッダードの「自然」理解においては、個々の産物だけでなくそれらの相互作用・プロセスまでも「自然」であるため、実質的にはもはや「自然でないもの」は存在せず、「自然・非自然の区別」そのものが撤廃されることになる。ただしウッダードは自然科学による自然の一元化を主張しているのではなく、むしろ物理的対象としての自然という枠組みを超えた、「開かれた体系」としての「自然」をシェリング読解から引き出している。

他方で「認知能力(思考)の自然化」は、一見すると現代哲学における人間中心主義への批判と親和的で

ある。というも、人間の精神活動や理性能力の特権性をはく奪する（自然化する）ことで、自然に対する人間の優位性の論拠を切り崩せるからである。ただしウッダードは「倫理的、政治的、存在論的に、人間と非人間を平坦にすること」（Woodard 2019, 1）には批判的である。ウッダードは、人間が（特権的ではなくても）「思考し、思考内容を技術によって具体化する」（Woodard 2019, 2）能力を持つことを強調するため、人間的思考の解明を放棄する（平坦化する）ような人間中心主義批判のアプローチには疑問を投げかける。換言すれば、ウッダードは人間の思考能力の「特権化」（非・自然化）と同時に人間と自然（非・人間）の「平坦化」をも批判し、むしろ「認知能力の自然化」により、人間の認知能力の「特殊性」（固有性）を「自然」哲学の対象へと置き換えることを目指している。ただしウッダードは「哲学や、さらに一般的に言えば人間の思考が、自然によってア priori に制限されるべきだ」（*ibid.*）と主張しているのではなく、むしろ「空間時間的に拡大していく自然の連続性の一部が思考である」（*ibid.*）と主張する。ウッダードが同書の副題を「運動、空間、思考の意志作用」としたことの意味がここで明らかとなる。つまり、「行動に対する思考の関係と同様に、空間や運動といった概念を、特に思考の発生に対するそれらの関係において」（Woodard 2019, 18）論じることがウッダードの目的なのである。

ウッダードは、「自然」が近現代の哲学において無視されてきたという問題意識をグラントと共有し、「シェリングを現代哲学において復権させる」という課題を引き継ぐ。しかしウッダードは、「シェリングのプロジェクトが曖昧さ、断片化、誤読からの救済を必要としているが故に歴史的な仕事」（Woodard 2019, 3）にグラントが終始していると指摘し、自らの構想がむしろ「シェリングを〔…〕現代の大陸哲学や分析哲学という具体的な異国の地と接触させること」（*ibid.*）にあると述べる。この点で、ウッダードはグラントには



見られなかった「シェリング自然哲学と分析哲学の接点」を描き出す。ただしウッドワードは現代の分析哲学者やプラグマティズムと直接シェリングを対比するのではなく、C. S. パース（一八三九・一九一四）とシェリングの比較を梃子にして、分析哲学にアプローチする。ウッドワードはシェリングの『学としての哲学の本質』（一八二一年）に見られるアリストテレスへの接近に「原始プラグマティズム」（Woodard 2019, 191）を見てとり、特にシェリングの「直観」概念とパースの「アブダクション」[abduction]「概念の方法論上の近さから両者の接点を考察する。

またウッドワードはグラントの「連続性テーゼ」（Woodard 2019, 5）を引き継ぎ、グラント以上にその正当化を試みる。ウッドワードは、シェリング哲学においてしばしば指摘される「体系的・一貫性の不在」を、むしろ「奪格的」[ablative]」（Woodard 2019, 6）な体系性と捉え直し、「いかなる知識体系にも先立つ体系、すなわち宇宙や自然がすでにある」（ibid.）という構想をシェリング自然哲学に見出す。ここでもウッドワードは、グラントにも見られる「思考に対する自然の優位性」（ibid.）、「自然を思考するわれわれ人間が存在しようとしてまいと、自然は在る」（ibid.）という態度を共有している。ただしウッドワードは続けて次のように述べる。「しかしわれわれが存在してからは、われわれに時間的に先行するこの自然を、われわれはどう考へるべきなのか」（ibid.）。ウッドワードがこの問いをシェリング哲学全体の核心と見なしている点で、彼がグラントから一步踏み出した「グラント以後」のシェリング研究を展開していると言える。なぜなら、ウッドワードの指摘は、グラントの『シェリング以後の自然哲学』には無かったシェリング自然哲学のさらなる展開可能性（分析哲学や認識論との自然哲学の接合や、グラントが否定したアリストテレス的自然学の再評価など）を射程に収めているからである。

## 2 ヘーゲル自然哲学研究について

ヘーゲル自然哲学研究については、複数の研究グループが定期的に会合を開き、その成果を論集として精力的に発表している。カイザーズラウテルン工科大学のヴォルフガング・ノイザーのグループがその一つであり、ヘーゲル自然哲学にかんする近年刊行された論集の多くがこの研究グループの成果報告である。<sup>18)</sup>この研究グループの特徴は、自然科学および歴史的研究に注力している点にある。すなわち「当時の自然科学」と「現在の自然科学」という二側面から、ヘーゲルの自然哲学を研究するという手法を重要視している。

またこの研究グループの例会以外でも、例えば二〇二二年二月には「ヘーゲルにおける自然と精神の関係について…歴史的観点と現代的観点」と題した国際ワークショップがフライブルクで開催された。さらに日本でも、東アジアヘーゲルネットワーク第四回会議として同年九月に国際研究会議「ヘーゲルにおける自然と生命」が京都で開催されるなど、ヘーゲル自然哲学研究は近年国際的に大きな盛り上がりを見せている。ヘーゲル自然哲学研究においては、ここ数年で数えきれないほど単著も刊行されているが、本稿ではそのなかの特定の動向に焦点を絞りたい。つまり、論理学と自然哲学の関係およびいわゆる「移行」問題を含めた一連の研究動向である。

クリスティアン・マルティンは『自己規定の存在論…ヘーゲル『論理学』の操作的再構成』(二〇二二年)において、ヘーゲル論理学を主題としつつ、「批判的存在論」という観点から論理学全体を再検討した。その主眼の一つは「自然哲学を成り立たせる論理学」がどのようなものかについて論究することであり、博士論文以後はその主題をより具体的に「空間・時間」概念の考察へと移している。

またそれ以外に、近年刊行された単著として注目すべきは、ゲオルク・オスヴァルトの『ヘーゲル『論理

学』における論理的理念から自然への自由な自己解放』(二〇二〇年)<sup>(15)</sup>である。これは先のマルティンの研究と比べても、より主題を限定して、いわゆる自然への理念の「移行」問題を論じている。マルティンが論理学全体の再構成を通じて論理学と自然哲学の関係を考察するのに対し、オスヴァルトは「概念論」理念章の意義を強調する。そのため両者は「自然哲学を成り立たせる論理学とはどういうものか」という問いを共有しつつ、そのアプローチにおいて異なっている。マルティンはあくまで「論理学」そのものの整合性と包括性を強調するため、論理学を实在哲学の「先取り」と見なしている。しかしそうすると、なぜそもそも「移行」が必要であるのかという問いが生じる。オスヴァルトはこれを論理学にとって内在的な問題と捉え、「概念論」理念章の読解を通じて答えようとした。オスヴァルトの答えは非常に簡潔である。

論理学は論理的理念であり、それは有限な理念でも絶対的な理念でもない。論理的理念としての論理学はむしろ、絶対的理念の一方の極である。しかし論理的理念に対してはまだ他方の極が対峙しており、それは同じく絶対的理念の規定に属し、「外在的理念」の名を冠する。両極を媒介せよとの必然性や希求が、外在的理念としての自然への論理的理念の移行を動機づける。(Oswald 2020, 18)

論理的理念が自身の外で外在的理念を媒介しようとするのが移行を動機づけ、この動機そのものが实在哲学の始まりを積極的に規定する。オスヴァルトもまたこの博士論文以降、实在哲学の始まりにおける「空間・時間」概念、さらにカントやシェリング自然哲学を踏まえた「物質」概念の検討に取り組んでいる<sup>(16)</sup>。マルティンやオスヴァルトらの研究においてさらに注目すべき点は、彼らが論理学と自然哲学の関係およ

び「空間・時間」概念を論じるさいに、アントン・フリードリヒ・コッホに多くを依拠していることにある。むしろコッホのヘーゲル論理学研究を引き受けて、自然哲学への展開を試みたことに彼らの独自性があるとも言える。コッホは自身の教授資格論文をもとに行った一九八九・九〇年冬講義「主体性理論の課題と問題」の原稿を、『空間と時間における主体性』（一九九〇年）<sup>17)</sup>として刊行した。この時点ですでに、のちにコッホが唱える「解釈学的実在論」<sup>18)</sup>の主要なテーゼ、すなわち「空間・時間」論と「主体性テーゼ」が見て取れる。コッホは同書の主要テーゼとして、「本質的に、主体性とは〔…〕空間と時間における諸人格や諸物のなかのひとつの人格のこと」（Koch 1990, 9）だと定義する。しかしコッホはここでヘーゲルにはば言及しておらず、そのためヘーゲル自然哲学における空間・時間論を念頭においているわけではない。ここでコッホの言う「空間と時間」は、主体の自己局在化に伴う座標軸のようなものとされる。つまり、「主体にとって〔…〕空間と時間における自己局在化であるところの根源的自己同定は、不可欠である」（Koch 1990, 36）からこそ、「空間・時間」なしの主体は考えられないのである。のちにコッホは『論理空間の発展…ヘーゲルのノン・スタンダード形而上学にかんする諸論考』（二〇一四年）<sup>19)</sup>において本格的にヘーゲルの空間・時間論に取り組むことになる。本書の第三部は「实在哲学について」と銘打たれているものの、実際には「空間・時間」論および「精神哲学」の一部のみを扱っている。特徴的なのは、自然哲学における「空間・時間」論においてすら「主体」概念を読み込んでいる点である。この点をオスヴァルトは引き継ぎつつ、「主体」をすぐさま「身体を持つ主体」と見なして「人間」に引き寄せてしまうコッホの考えに対しては距離を取る。オスヴァルトはむしろ实在哲学の展開を通じてはじめてそうした人間的主体が形成されると考え、「空間・時間」および「物資」と主体との概念的連関を解明しようと試みる。以上を踏まえると、ヘーゲル自然哲学

研究の問題圏には、精神哲学との関係（あるいはそれへの「移行」）もまた重要な課題として含まれていることになる。

### 3 結びに代えて——自然哲学の展開可能性

ここまで、シェリング・ヘーゲル自然哲学研究における最近の動向を概観してきた。シェリング自然哲学研究については、ドイツ語圏での全集の刊行状況とそれに続く今後の展開、そして英米圏でのシェリング・ルネサンスにおけるグラントやそれ以後の自然哲学研究について紹介した。ヘーゲル自然哲学研究については、論理学と实在哲学およびその移行の問題という、これまで幾度となく論じられてきた問題に対して、現在はどうのように研究が行われているのかを紹介した。このことを通じて、シェリング・ヘーゲルどちらの自然哲学研究においても、グラントやコッホといった近年の实在論ブームに多少なりともかかわりのある人物が影響を与えていることを確認した。この影響を決定的なものを見なすかどうかは解釈の余地があるが、一つの参照軸となっていることは間違いない。

最後に、本稿では扱えなかった自然哲学上の二つのテーマに言及したい。「エコロジー」の問題と「有機体論」である。本稿では「实在論」の観点から新しい動向として「物質」概念や「空間・時間」論にかかわる研究を強調したが、自然哲学における有機体論研究や、自然科学・科学史との比較研究が下火になったわけではない。また、現代的テーマとして、人類の「絶滅」という危機に足を踏み入れた「人新世」という時代把握に対する応答も、シェリング・ヘーゲル自然哲学研究の立場から試みられている。確かに、グラント以後の世代の代表格であるウッダードなどは、「本書『シェリングの自然主義』」での私の興味はエコロジー

についての倫理的で政治的な主張ではなく、そうした主張を可能にする自然概念にある」(Woodard 2019, 1)と控えめな態度を示している。しかしウィルスは『シェリングによる野生の実践』(二〇一五年)<sup>23)</sup>でグラントによるシェリングの自然哲学読解をさらにドゥルーズへと接近させ、「思考のイマージュ」を媒介にしてシェリングの「想像力」論と「野性的」自然とのつながりを回復させようと試みている(Cf. Wirth 2015, 23)。グラントと対立するミグラード<sup>24)</sup>ですら、一方で自然を「生きた象徴」と捉え、他方で「人間」を「考える自然」と見なすことで、相互補完的な「人新世の否定環境学」の構築を試みている(Cf. McGrath 2019, 26)。このように多くの論者が(グラントを踏まえ、あるいはさらにシェリングのテキストへと立ち戻りながら)「人新世」の議論へアプローチしている。またヘーゲル自然哲学研究からの応答については、二〇二四年五月にポルトガルで「自然哲学と環境にかんするヘーゲルの視座」と題された会議が開催予定であることをここで言い添えておこう。

本稿で扱えなかったもう一つのテーマである「有機体論」は、近年とりわけ「生物学の哲学」の観点から、ヘーゲル自然哲学研究において盛り上がりを見せている。<sup>25)</sup>アンドレア・ガンバロットは『生命力、目的論、有機化…自然哲学とドイツにおける生物学の台頭』(二〇一八年)<sup>26)</sup>において、カント以降のドイツにおける生物学の歩みと有機体論を扱っているのだが、その最終章で当時の生物学の発展におけるヘーゲルの立場を検討している。ガンバロットの見立てによれば、ヘーゲルは他の自然哲学者ら(カントやシェリング)とは違い、「統一された学問領域」としての「生物学」の論争に積極的に介入はしなかったものの、「第三者的立場の観察者」としてその論争を俯瞰できる立場にあったのだとされる。そのことによってヘーゲルはむしろ、ある種の主観的「意図」としてしか「目的論」を捉えなかったカントへの批判を展開しつつ、他方でシェリ

ング自然哲学のような過剰な思弁性からも距離を取ることができたのだ。こうしてヘーゲル自然哲学は最終的に、「目的論」を「内在的目的性」すなわち「自律的自己組織化」として理解することで、「生物学的個性」の理論に帰着することとなった。このようにガンバロットは当時の生物学の状況を踏まえながら、ヘーゲル自然哲学のアクチュアリティを取り出そうと試みている。

より包括的に現代の有機体論と自然哲学を扱ったのが、ユク・ホイの『再帰性と偶然性』(二〇一九年)<sup>(25)</sup>である。そこでホイは現代における新たな有機体論(「器官学」ないし「宇宙技芸」)を構築するために、シェリング及びヘーゲルの自然哲学を参照している。研究史的に見て興味深いのは、ホイがここでグラントだけでなくガブリエルにも言及して、シェリングとヘーゲルの読解を進めている点である。そこでホイが参照するのは、いわゆる「新しい実在論」をガブリエルが主張し始める以前の著作、すなわち『超越論的存在論——ドイツ観念論についての試論』(二〇一一年)<sup>(26)</sup>なのである。同著でガブリエルはシェリングとヘーゲルにおける「偶然性と必然性」の関係を論じており、偶然性が「事後的に必然性」となる構造を描き出した。ホイはこれを範として、「偶然性が再帰性を通じて必然性」となる構造を、これまでの「有機体論」の歴史を踏まえつつ哲学的に再検討している。ここに、ホイが現代実在論者によるドイツ古典哲学読解から重要な論点や概念を巧みに引き出しながら、自身の問いへとアプローチしていく様子がうかがえる。

本稿では近年の一部の研究の紹介しかできなかったが、実在論的転回以降の思想状況において、グラントやガブリエルらの第一世代に対し、早くもウッダードやホイのような「第二世代」の研究者が登場していることを鑑みると、本邦でも「紹介」のみならず「受容」および「応答」へと進んで行く必要がある。ドイツでシェリング・ヘーゲル自然哲学を扱う研究グループが成立し本格的に活動が始まったのは意外なことに一

九八〇年代になってからだが、日本でも一九八八年に「自然哲学研究会」が発足し、定期的に会誌や論集の刊行が行われていたという歴史がある<sup>(27)</sup>。こうした先人たちの蓄積を適切に継承しつつ、同時代の研究動向に応答していくためには、研究者グループの結成による集団的な取り組みが不可欠と言えるだろう。

- (1) 現代実在論の動向は一般に「思弁的実在論」の論者を指して「思弁的転回」と呼ばれているが、しばしば「実在論的転回」とも呼ばれる。「実在論的転回」という表現を用いたものとして例えば以下を参照せよ。菅原潤『実在論的転回と人新世——ポスト・シェリング哲学の行方——』、知泉書館、二〇二一年。
- (2) Sebastian Schwenzfeier, *Natur und Subjekt: Die Grundlegung der schellingschen Naturphilosophie*, München: Karl Alber, 2012.
- (3) Volkmar Preuß, *Die Entwicklung der Naturphilosophie Schellings von seinen Platonstudien bis zur Spekulativen Geometrie: Die Konstruktionen des Raumes, der Naturkräfte und der Materie in Schellings Naturphilosophie 1794-1802*, Hamburg: Dr. Kovack, 2018.
- (4) 英米圏の研究についてより詳細に論じたものとしては以下を参照せよ。中島新「グラント「以後」のシェリング自然哲学グラントからウッタードへ」『現代思想』vol.49-1、青土社、二〇二一年、五三-六二頁。
- (5) Iain Hamilton Grant, *Philosophies of Nature after Schelling*, New York/London: Continuum, Paperback edition 2008 [First published: 2006].
- (6) こゝでの「英米圏」という表現は、主に英語を介して営まれた研究上の交流・影響関係の総称として便宜的に用い、とくにドイツ語による研究と区別することを意図している。
- (7) Alistar Welchman / Judith Norman (ed.), *The New Schelling*, New York/London: Continuum, 2004.
- (8) Jason M. Wirth (ed.), *Schelling Now*, Bloomington: Indiana University Press, 2005.
- (9) この点でグラントはシジェクすらシェリング主義者ではなく「フィヒテ主義者」と見なす。詳しくは以下を参照せよ。中島新・中村徳仁「I・H・グラントの「超越論的地質学」——シェリング主義とドゥルーズ」『夜航』No.5、二〇二一年、九三-一〇八頁。
- (10) グラントによる「二世界的な自然学」と「一世界的な自然学」の区別について詳しくは以下を参照せよ。菅原潤「グラントにおける事物化されないものとしての自然——思弁的実在論を論じる前に」『国際哲学研究』別冊十一号、二〇一九年、



- 六五・七五頁、ここでは特に六六・六七頁。
- (11) トリットンとウィスラーは、厳密には「グラントのその著作以後」という表現を用いて、英米圏の（ウッタードも含めた）多くのシェリング研究をその動向に属属させている。 Cf. Daniel Whistler / Tyler Tritton, "Editorial Introduction: schellingian experiments in speculation". In: Pelagia Goulimari (ed.), *Angelaki. Journal of The Theoretical Humanities*, vol.21:4, London: Routledge, 2016, pp.1-9. 本稿では彼らに依拠して「グラントの『シェリング以後の自然哲学』に影響を受けた英米圏でのシェリング研究の一連の動向を「グラント以後」と呼ぶ。
- (12) Ben Woodard, *Schelling's Naturphilosophie. Motion, Space and the Volition of Thought*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2019.
- (13) ノイザー自身が研究会の歩みを回想するとともに「この研究会の成果報告として出版された書籍のリストを提供している」。 Wolfgang Neuser, "30 Jahre Internationaler Arbeitskreis zu Hegels Naturphilosophie". In: Wolfgang Neuser / Steffen Lange (Hrsg.), *Natur zwischen Logik und Geschichte: Beiträge zu Hegels Naturphilosophie*. Würzburg: Königshausen & Neumann, 2016, S. 267-271.
- (14) Christian Georg Martin, *Ontologie der Selbstbestimmung: Eine operationale Rekonstruktion von Hegels "Wissenschaft der Logik"*. Tübingen: Mohr Siebeck, 2012.
- (15) Georg Oswald, *Das freie Stich-Entlassen der logischen Idee in die Natur in Hegels Wissenschaft der Logik*. Hamburg: Felix Meiner, 2020.
- (16) ヘーゲル自然哲学における「空間・時間」の先行性と「物質」との関係についての研究には、ほかに例えば以下がある。 Takashi Nagashima, "Hegels Zeit-Raum-Lehre in seiner Naturphilosophie der "Enzyklopädie"". In: Yoichi Kubo / Seichi Yamaguchi / Lothar Knatz (Hrsg.), *Hegel in Japan: Studien zur Philosophie Hegels*. Zürich: Lit, 2015, s. 121-137.
- (17) Anton Friedrich Koch, *Subjektivität in Raum und Zeit*. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1990.
- (18) この立場について詳しくは以下を参照せよ。 Anton Friedrich Koch, *Hermeneutischer Realismus*. Tübingen: Mohr Siebeck, 2016. これに対する解説およびガブリエルとの論争については岡田勇督「A・F・ロッホの解釈学的実在論」『夜航』No.4 二〇一九年、五二一-六八頁。
- (19) Anton Friedrich Koch, *Die Evolution des logischen Raumes: Aufsätze zu Hegels Nichtstandard-Metaphysik*. Tübingen: Mohr Siebeck, 2014.
- (20) 同書のタイトルにある「ノン・スタンダード形而上学」もこの章で集中的に論じられている。この「ノン・スタンダード形而上学」を応用し、「ノン・スタンダード存在論」として展開したうえで、ガブリエルの「意味領野存在論」の欠点を指

- 摘したものととしては大河内泰樹「多元的存在論の体系——ノン・スタンダード存在論としてのヘーゲル「エンチュクロペディ」——」『思想』No.1137、岩波書店、二〇一九年、六・二十頁。
- (21) Jason M. Wirth, *Schelling's Practice of the Wild: Time, Art, Imagination*. Albany: State University of New York Press, 2015.
- (22) Sean J. McGrath, *Thinking Nature: An Essay in Negative Ecology*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2019.
- (23) この研究動向にかんする優れた導入としては以下を参照せよ。Andrea Gambarotto / Luca Illetterati, "Hegel's Philosophy of Biology? A Programmatic Overview". In: *Hegel Bulletin* 41/3, 2020, pp. 349-370. 同論文の掲載号は「ヘーゲルと生物学の哲学」を題した特集号であり、他にも同テーマにかんする多数の論考が収録されている。
- (24) Andrea Gambarotto, *Vital Forces, Teleology and Organization: Philosophy of Nature and the Rise of Biology in Germany*, Dordrecht: Springer, 2018.
- (25) Yuk Hui, *Recursivity and Contingency*. London: Rowman & Littlefield International, 2019 (ユク・ホイ著 原島大輔訳『再帰性と偶然性』青土社、二〇二二年)、また同書に関する詳しい解説は以下を参照せよ。浅沼光樹『ポスト・ヒューマニティーズへの百年 絶滅の場所』青土社、二〇二二年、とくに三二一-三三三頁。
- (26) Markus Gabriel, *Transcendental Ontology: Essays in German Idealism*. London: Bloomsbury, 2011.
- (27) 研究会設立の背景および活動については以下を参照せよ。松山壽一「自然哲学とは何か」『理想』No.649、理想社、一九九二年、一九・三三頁。発足当時の顧問は加藤尚武、世話人は長島隆が務め、一九八八年十二月より活動を開始したとされる。

(なかしま あらた・ボン大学哲学科博士課程)